
古き都の夢幻

雪代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古き都の夢幻

【Nコード】

N0265Z

【作者名】

雪代

【あらすじ】

それは似ているようで似てない世界。舞台は日和が国の中心、天霊が都。以前に起こった『空亡』と言う名の妖怪を中心とした騒動から五年。ただ見守ることしか出来なかった少年は、夜の都で出会った一人の少女と共に物語を紡ぎ始める。

01（前書き）

一次創作の新しいの始めました。

東方の二次創作で色々妖怪とかについて調べるうちにこれらの設定使って一次創作作れんじゃね？と思って書いてしまった作品。
亀更新になると思いますがご容赦ください。

綺麗だな、って……初めて彼女を見た時、そう思った。

「ようこそ……………私の領域^{イム}へ」

悪戯っ子のように笑う彼女はとても輝いていて、僕は無意識に唾を飲み込む。

街中の街灯がやけに眩しくて、心臓の破裂しそうな鼓動を感じ、つう、と一滴の汗が流れる。

電柱の頂上に腰掛けた彼女の髪を風が揺らす。くすぐったそうに目を閉じるその姿に目が奪われる。

思考が空回りして、纏らない。聞きたいことも言いたいこともたくさんあったはずなのに、彼女がこちらを見て笑いかけたら、一瞬にして思考が吹き飛んだ。

自身が死に掛けていたことも忘れて。

自身を死へと誘っていたモノを至極あっさりと殺した頭上の彼女、そんな事実すら忘れて彼女だけに視線を奪われていた。

どうしようもないことに。

どうにもならないことに。

僕は一目見た瞬間から。

彼女に心を奪われたらしい。

「……………キミは……………誰？」

呆然自失としながらも口からは言葉が突いて出る。

「あたしユキ。キミもそう呼んでね」

「……………ユ……………キ……………」

「天霊の都で夜遊びだなんて……………キミも命知らずだね」

言われればそうだ……………この都で夜に出歩くのは、化け物かそれを退治するものと決まっている。

けれど自分はそのどちらにも属さない……………いや、属せない。

「キミ、自殺志願者？」

あながち間違ってもいないかもしれない。

「どうせ……………家の内にも外にも、居場所なんてないんだ」

だったら……………。

「あゝもゝ！くっらいなゝ！決めた。キミ、私と友達になろう。とりあえず、名前は？」

紅い瞳の奥に、有無を言わさない何かを込めて彼女は僕を見つめる。

「僕は……………僕は御門……………千歳です」

止まった思考、けれど無意識的にでも聞かれたことに答えていた。

「そう、千歳……………また明日ね」

その言葉の意味に、僕は気づけなくて……………。

月が差し込む交差路で……………いつからか、僕はそこに迷い込んでいて。

そして僕は……………。

……………彼女と出会ったんだ。

「転校生を紹介する」

担任の言葉に顔を上げる。

一学期終りかけのこの次期に？という疑問に、クラスメートたちがざわつく。

教師の呼びかけに入ってきたのは一人の少女。白い髪をリボンで括り、紅い目をした……。

「どーも、あたしの名前は水月雪姫^{みなつき ゆき}だよ。よろしくね」

快活に笑う彼女を見た瞬間、心臓が跳ね上がった。

「う……そ……」

紹介を終え、クラスの最後尾の席へと向かう彼女。そして、擦れ違った瞬間。

「よろしくね、千歳」

そんな言葉が聞こえた気がして、目を大きく開いた。

放課後、やることも無く、クラブにも入っていない自分はそのまま直帰する。

いつも通りのはずの帰路、その隣には何故か今日転校してきた彼女がいた。

「驚いた？ねえ、驚いた？」

楽しそうに聞いてくる彼女に驚いた、と言うとやった、と喜び跳ねる。

「そんなに楽しい？」

「楽しいよ。だって私、友達なんてキミが初めてだから」

意外な言葉に思わず立ち止まる。

「どうしたの？」

「今まで友達いなかったの？」

「そうだね、意外だった？」

「うん……すごく」

「そもそも私がこれまでいたところって人があんまりいなかったからね」

どこかの田舎からやってきたのだろうか？

何せここは日和の国が中心、天霊てんりょうが都なのだから。

「ねえ、昨日から気になってたんだけど、御門ってアノ御門？」

ああ、やはり知っていたか、と嘆く。出来れば知らないで欲しかった、自分なんかを友達と言ってくれた彼女だから、知らないで欲しかった。

「……………うん、そうだよ。陰陽寮統括御門一族……………それが僕の家」

陰陽寮。魑魅魍魎が跋扈するこの天霊の都で少なくとも千年以上前から存在していた非科学を専門とする帝直属の組織。妖怪の樂園と呼ばれるこの天霊の都が日和の中心、首都としてこの地に根付いていられるのも、彼らの活躍があつてこそだ。

そして、その陰陽寮の頂点、それが御門一族。ミカドと言う姓を名乗ることを帝直々に許された陰陽の大家。名門中の名門だ。

「へえ、すごいじゃん。じゃあ、妖怪退治とかしてるんだ。もしかして夜中出歩いてたのはそれ？」

「……………めて」

「一般人を妖怪から守る、正義のヒーローじゃん」

「止めて！！！」

「！？」

ふいに僕の出した大声に、彼女が驚き、目を丸くする。

「止めて……………僕は……………ダメなんだ……………僕は……………」

御門千歳。

御門家の現当主。

それが、僕の肩書き。

そして……………天賦の才を持ち、近年で最強と言われた父親を持ちながら、一切の術が使えない一族の落ち零れ。

それが……………僕だった。

その後、彼女と別れて、家へと帰宅する。そしてそのまま街中を当てもなく彷徨う。

理由など分かりきっている、家にいたくないから。

陰陽師の大家に生まれながら陰陽師としての資質が一切無い自分に、居場所など無かった。

父が当主だった頃は家も纏っており、何もかもが上手く回っていたのに。

「……………空……………亡……………」

それが父が命を賭して調伏しようとし、破れた妖怪の名……………らしい。

実際に父が空亡と戦っている姿を誰一人として見ていない上に、

見た人間は全てその時死んでいるので、本当に父がその妖怪に殺されたのかは不明。

ことの始まりは五年前、天霊の都の中央に座する宮廷に一匹の件くだんが現れたことだった。

曰く「月が千度登りし後、世界は黒き太陽に覆われ、そして人の世は終わりを迎える」。

件は牛の体と人の頭を持つ妖怪だ。一部では神獣などとも呼ばれており、凶事が起きるとき、件は現れその凶事を予言し、そして死んでいく。そして件の予言は必ず未来に起きることである。故に朝廷は上から下への大騒ぎとなった。騒ぎの中一人冷静だった帝が陰陽寮にこの予言を解釈させた。そしてこの黒い太陽とは『空亡そくいなき』という妖怪ではないだろうか、という話になったらしい。

妖怪空亡。黒い太陽とも呼ばれ、百鬼夜行の最後に現れるとされる妖怪。けれど、一度足りとてその姿を見たものはおらず、どんな容姿なのかも分かっていない。本当に存在するのかどうかも怪しい幻の妖怪。

そんな実在の確認すら取れていない妖怪の資料がなぜあるのか、そんな資料に信憑性があるのか怪しいものであったが、けれど黒い太陽と言う言葉は件の予言と合致する。

そして陰陽寮統括一族御門家の当主であった父がその調伏を命じられ、父は五年前から空亡の調査を始めた。因みにこの時僕の年齢は9歳。父がどんな重荷を背負っているのか、気づかずいつも通りに終るのだらうと、そう思っていた。

半年後、父とその仲間たちが行方不明となり、さらに半年後、父が死体となって都に帰ってきた。

そして、御門家当主は世襲制故に僕、御門千歳が御門家の当主を世襲した。

この時、まだ10歳。

「当主襲名、喜ばしきことである……して、汝が父の果たせなかつた役目、継いでくれるな？」

有無を言わせない威圧を伴って、御簾の向こう側の人物、天皇天日様が尋ねる。

御門は朝廷でも大きな権威を持つ天霊の守護者。それ故、当主が代われば帝へ挨拶にも行かなければならない。

そして出会ったのは、父を越えた化け物であった。

日和の頂点、天皇天日てんにち。天照大神の血族である皇族の頂点。彼に出会った他国の政府関係者は口を揃え必ず言う……私は神と出会った、と。

父の果たせなかつた役目……つまり空亡の調伏。

それは、僕の役目となった。

01（後書き）

タイトルが思い浮かばなくて頑張っ て書いたら厨二臭くなった……。一応タイトルも内容に基いてつけてるんですけど、やっぱり厨二臭いなあ。

02（前書き）

二話目にして早くも戦闘。過去の小説の中で最短じゃないだろうか。

気づけば僕はまた、そこにいた。

「千歳……キミは良くここに来るね。まあ、とにかく……ようこそ

私の領域^{イレ}へ」

「……………水月さん？」

放課後別れたばかりの白い少女が昨日と同じ場所に座っていた。

「硬いなあ。ユキでいいよ」

「え、でも……………」

「でもない、ユキ」

「ユ、ユ……………キ？」

僕の言葉に満足したのか、うんうん、と何度も頷く。

「ねえ、そんなとこにいないでこつち来ない？風が気持ちいいよ」

「……………電柱の頂上なんてどうやって登るのさ……………というか、どうやって登ったの？」

「さて、ね？うーん、仕方ない、じゃああたしが降りようか」

そう呟き、ひよい、と軽々しく飛び降りる彼女に、驚き思わず危ない、と叫びそうになって。

「よつと」

軽々しく着地する彼女の姿に、また驚く。

「どうかしたの？」

どうかしたどころの騒ぎではない、凡そ10メートル近い高さから飛び降りて平然としているのだから。

「ユキ……………キミは……………」

何者？と聞こうとしたその口が彼女の指に塞がれる。

「……ふふ、秘密、かな？」

そう言って悪戯っぽく笑う彼女に、トクン、とまた心臓が跳ねたけれど。

「ああ、今日は珍しくいつぱい来るね。また何か来たみたいだ」
彼女のその言葉に振り返り……そして絶句した。

「送り狼一か……千歳、ずっと憑けられてたみたいだね」

そこにいたのは、一匹の狼。吼えるわけでもなく、唸るわけでも無い、ただじつとこちらを見つめる冷やかな視線は、それがただの獣ではないことをまじまじと示していた。

即ち……これこそ。

「……妖怪………」

「今日は千客万来だなあ」

暢気な口調で呟く彼女とは対称的に僕は焦っていた。

家が家だけに、妖怪退治というものに行ったことはある。術が一切使えなくとも、裏方の仕事（妖怪が逃げないよう退魔札を貼ったり、単純に符を運んだり）なら少しは役に立つことができた。だが、それだけだった。

目の前で直接妖怪と相對したことが無い。あつたとしても、それは幾人もの味方がいる時だけだ。

「………っ」

悔しさに齒噛みする。御託を並べても結局のところ、恐れて尻込みしているだけの話だった。

靈気を持たない自分では、まともに妖怪とやりあうことなどできない。その上、今はまともな道具も持っておらず、ほとんど素手だった。

これでは妖怪相手に逃げることにすら難しい。

油断していた……今までずっと、誰かに守られてきたから。

自分は大丈夫。自分は死なないと。

忘れていた。

もうあの父親はいない。もう自分の味方は誰もいないのだと。

狼がこちらを見る目が変わる。冷ややかで観察するような目から、
獰猛で攻撃的な目へ。

「ユキ、逃げて」

その前に彼女だけでも逃がさないとならない。例えここで死ぬことがあろうと、彼女が何者であろうと。

御門の当主として、陰陽師の家系の端くれとして、男として……
目の前の彼女を助ける。

言ってみれば、些細な矜持だ。^{プライド}意地のようなものでもある。

だから。

「無理だよ……もう囲まれてるから」

その言葉に目を見開き、周囲を見渡す。

そこには自分たちの周囲を取り囲むように二匹ほどの狼がいた。

「嘘……」

詰んだ……一匹でもどうしようも無いのに、この上さらに二匹も
いるのだ。

どうしようも無い……ここで……死ぬ……。

……死ぬ？

ドクン、と。

心臓が鼓動を打つ。

もう世界に自分の味方などいなかった。この世界に自身の居場所
は無かった。

だから、いつも死んでしまいたいと、どこか心の中で願っていた。
死ねば……この全てのしがらみから開放されると。

どこか……そんなことを思っていた。
けれど、いざ死ぬかもしれない、という時になって。
生きたい……そう思った。

ドクン。

また一つ、心臓が鼓動を打つ。

「嫌だ……。まだ、死にたくない」
言葉にしてみれば、その思いはすつと胸の中に納まった。
そうだ、まだ死にたくない。

僕は……こんなところで死んでられない。

そう思っていると、隣でクスリと笑い声が聞こえた。

「さつきより、ずっとマシな顔になったじゃん。そっちのほうがあ
たし好みだよ。そうだよ、人間は簡単に死を受け入れることなんて
できないものなんだよ……粹がつて、格好つけてみてみいざそ
の時になればみつともないくらいに足掻いてしまふ。それが人間」
けれど……、そう呟くのが聞こえた。

「その何が悪い？生きてたい、死にたくない、そう思うことの何
がいけない？思えないやつは結局、人間どこるか生き物として壊れ
てる。そんな歪、あたしは人間だなんて認めない。あたしの友達だ
なんて断じて認めない……だから」

彼女、ユキがこちらを向く。そして、いつもより綺麗に輝く紅い
瞳で、いつもみたいに悪戯っぱ笑いながら。

「千歳……絶対生き延びるよ」

そう、断言した。

「先に言っておくけど、御門の一族って言っても、僕はまともに術なんて使えないから」

失望されても仕方無い、けれど後になって言っても遅い。そう思っ
て言ったことだった。けれど、ユキは何も聞かず。

「じゃあ、あたしが頑張らないとね」

そう言っ
て不敵に笑う。いつから持っていたのか、その手に古びた唐傘を携えていた。

目を丸くし、口を開きかけた瞬間、狼の一匹がこちらに向かって飛び出す。

「させない！」

僕と狼の間に割り込んだユキがその傘の一閃で、狼を押し返す。けれど、その様子を見ていた残りの二匹も同時にやって来る。

ユキが一匹に向かって傘を振り下ろすが、それをさっと避け、逆にユキへと飛び掛る。

けれど、冷静にそれを見切り、避け様に傘で一撃加えると、怯んだ狼が一旦下がる。

「……………」

そして僕のほうにも一匹向かってくる。普通に考えればどうしようもない。実際、さきほどまでは恐怖で体が竦みあがっていた。

けれど、生きたいという思いが恐怖を塗りつぶし、体の自由を取り戻す。

同時に狼が飛び掛る、いつもの僕なら絶対に避けることもできないだろ
う速度。

脳裏に思い描くのはさきほどユキが見せた動き。

そして目を見開き、狼を見る。観て、視て、診て、見る。

一挙手一投足にいたるまで神経を使い、ただただ脳裏に描いた動きをなぞっ
ていく。

そして、最後に傘の代わりに拳を振りぬく。鼻先に拳の一撃を喰らった狼が呻うめきを上げ後退する。

「……………できた……………」

自身でも信じられないことに、体は脳裏に描く軌道をなぞり、そして狼を避けると同時に、避け際に一撃を入れるという動作をしてみせた。

ふとユキを見る。向こうもこちらを向いていて、目が合う。
「やるじゃん」

そしてまた、悪戯っぽく笑った。

02（後書き）

受験終わった！！

多分オワタ、いろんな意味で。

ということでこれからはもっと更新に本気出す。

03（前書き）

序章終了。これから第一部が始まります。
今回早くもちよつとだけネタばらし。

さて、相手に一撃くれたところで、未だ三対二ということこちらに不利な状況だということに変わりはない。

「絶望的でもないだけマシかな」

少なくとも第一波は防いだ、否、防げた。それが持つ意味は大きい。

「いけそうみたいだし、こっち二匹でそっち一匹っていう具合に分けようか」

そう言うのはユキ。こっちが一匹というのが男としては情けなくなるが、しかし能力的に見て間違いじゃないのがさらに情けない。

「一つだけアドバイス。どうにもならなくなったら、心から思ったことを叫んでみるといいよ……………それじゃ、またね」

よく意味が分からない。後どうにもならない状況にまで追い込まれたくない。と言つてもすでに二匹引き連れてユキは移動を始めていたので言つても無駄だが。

そしてその場所に僕と一匹の妖狼が取り残される。その目は完全に僕をロックしていて、視線を外せば今にも襲い掛かってきそうな勢いだつた。

さつきは上手く避けれたけど、あんなことそう何度もできるわけじゃない。一度避けただけで全身の神経が磨り減つたような感覚に襲われる。当然だ、一つ間違えれば死ぬようなやり取りだったのだから。

「何か……何か、武器が欲しい」

ユキの持つ傘のような、できれば長物の武器が。少しでも距離を取ろうと、僕がジリジリと後退すると、相手にもじり寄ってくる。

そして、下げた踵にコツンと何かがぶつかり、僕は足を止める。カランカラン、と音を立て転がるそれは、狼から視線を外せないの、見えはしないが明らかな金属音と転がる際のコロコロと言う音から見て、金属性の輪のようなもの。しかも、ボルト程度の大きさならあんな重い音はしない、それなりの大きさのある物だ。

「鉄パイプ？」

淡い期待を抱きながら、足で転がるそれを止め、体より前へと持ってくる。そして足で固定したそれを、ちらりと見る。期待通りのものがそこにあった。

「何でこんなところに……いや、それよりこれだ……っ！！！」

ほんの一瞬、視線を外した隙を突いて、狼が走り出す。

大丈夫……落ち着いて……さっきの行動からいって。

「ここで飛び掛ってくる！」

さきほどと同じように飛び掛ってくる狼に、視線を向ける。

「今っ！！！」

そして、タイミングを併せ、足を振り上げる。足の甲に伝わる生々しい感触に歯を食い縛り、足の上の狼ごと蹴り上げる。気が逸つたか、はたまた狼のほうが反応したのか、蹴り上げた足の感触は弱かった。

「浅かった！？」

けれど、狼にそれなりの痛手は負わせたようで、少しよろめき数歩後退する。

「今のうち！！！」

それを見た瞬間、しゃがみ込み足元の鉄パイプを拾う。それを隙と見たか、狼がまた飛び掛る。

「それも、計算尽くだああああ！！！！！」

起き上がってはいは間に合わない、中腰のまま下半身を固定。そして体捻りながら相手を見据える。

「今度こそ、当たれ！！！」

今度は少しだけ目測よりも遅く体を捻り、両手に持った鉄パイプ

を一字に振る。体の捻りが加わったその一撃は、想像以上に強烈だったようで、狼は2、3メートルほど浮き上がったまま宙を飛び、そして落下してからもゴロゴロと転がっていった。

「……はぁ……はぁ」

ユキと別れてまだ三分も立たないというのに、すでに息が上がっている。たった一度の攻防で恐ろしいほど神経を使う。そのツケが体にまで来ていた。

足が震え、膝が笑う。鉄パイプを杖代わりにしなければならいほど足に力が入らない。

狼はピクリとも動かず、僕の吐く荒い息だけが場に響く。

「やったの……？」

終わった。そう思った瞬間、緊張から解き放たれた全身から力が抜け、その場に座り込む。

「………は、はは………やった。僕………一人で、妖怪を………」

瞬間、左肩に鋭い痛みが走る。首だけで振り返ると、そこに一匹の狼がいた。

「………え？………あ………あぁ………あぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！！！！！！！」

脳がそれを認識した瞬間、肩が焼けたように熱くなり、絶叫を上げる。

そのまま態勢を崩し転がると、狼が離れる。

「い、いた………痛い………痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイ」

左肩を右手で抑えながら顔を上げる。

そこに、群れを為した狼たちがいた。

ワオオオオオオオオ！！！！

先頭に立つ一匹の遠吠えに併せ、どこからか次々と狼が出てくる。すでに周囲は十や二十では聞かない数の狼に取り囲まれていた。

「……………な、何で……………」

先頭に立つ狼の体に傷があった。つまりそれは、さきほど自分が倒したと思っていた狼。

普通に人間ならとくに死んでいるか、動けないほどの大怪我をしているほどの一撃だったはずだ。

「これが……妖怪……………」

そしてさきほどと違う点の一つ。

「紅い……………」

狼たちの眼が赤く染まっていた。少なくともさきほどまでは黒かったはずの眼が。

「それに……あれは……………なに？」

その狼たちの体から立ち上る赤い靄もやのような何か、あれはいったい？

ワオオオオオオオオオオオオ！！！！

狼の遠吠えに、全ての思考が吹き飛ぶ。

そうだ、何を考え事などしている暇がある！！？

そんなことを考えるくらいならこの状況から生き残ることを考えるべきだ。

けれども。

「生き残る……………？……………ど《・》うやって？」

左肩をやられ動くのにも支障が出ている僕。そして僕の周囲を取り囲む三十を越えた狼の群れ。

この状況でどうやって生き残れというのだろうか？

そうだ……………何を舞い上がっていたのだろう。まさか僕ごときが妖怪相手に戦えるつもりだったのか。少しばかりいつもより上手かったから調子に乗っていたんだ。術の一つも使えない分際で妖怪と

戦うだなんておこがましい。結局僕は、どこまで言っても落ち零れなんだ……。

ドウセナラココデシンデシマエバラクニナレルノニ。

僕の心を感じ取ったか、狼たちが群れを為して飛び掛ってくる。

ああ、これで……本当の本当に、終わりか。

たった一つ、心残りがあるとすれば、彼女のこと。

絶対に生き残るって、約束しちやったしなあ。

きつと彼女なら逃げるくらいできるだろうけど。

僕が死んだら、彼女は悲しんでくれるのかな？

別れ際も、またねって、言ってくれたし。

……そう言えば、その前にも何か言ってたっけ？

一つだけアドバイス。

彼女は、何ていったんだっけ？

どうにもならなくなったら、

なったら？

心から思ったことを叫んでみるといいよ

心から、思ったこと？

今僕が思っていることって何だろう？

死にたい……かな？

………何か違う。しっくり来ない。

まさかとは思っけど。

もしかして僕は。

この状況でもまだ、生きたいって……そう思ってるの？

カチリ、と僕の中で何かがはまった。

そうだよ、人間は簡単に死を受け入れることなんてできないものなんだよ………粹がつて、格好つけてみてもいざその時になればみつともないくらいに足掻いてしまう。それが……。

それが、人間。

その何が悪い？生きてたい、死にたくない、そう思うことの何がいけない？思えないやつは結局、人間どころか生き物として壊れてる。そんな歪^{いびつ}、あたしは人間だなんて認めない。あたしの友達だなんて断じて認めない………だから。

だから……。

「……………絶対に生き延びる！！まだ、死ねない！！死にたくない！！………」

それは心の底から出た渴望……………願ひ。

願ひは、思いの力となつて。
現世へと……………流れ出すんだ。

そうだ……………そのための力が、僕にはあるじゃないか。

「
《絶断》^{たちきり} 《打消》^{うちけし} 《殺壊》^{ころしこわす} 《終求》^{おわりもとむ} 《滅世》^{ほろびよ} 《来臨》^{きたりのぞむ} 《降誕》^{おろしうみ} 《

.....。
.....。
.....。
何をやったのか……僕自身覚えていない。
ただ無我夢中で、何かを願った。

そしてそこには、消し飛び姿を消した妖怪を除いた……僕一人が
座り込んでいた。

「随分派手にやったね」

「……何も覚えてないから分からないよ」

声に振り返る事無く答える。

「一つだけ聞いてもいいかな？」

「なに？」

「千歳の使えない術っていうのは、全部靈氣を使ったもの？」

寧ろそれ以外に何があるというのだろうか？靈氣は人の持つ力。妖
気は妖怪の持つ力。ならば人間の使う術に靈氣以外のものがあるは
ずがない。

「そつか……知らないんだね」

何を知らないというのだろうか？それでも昔は術が使えるようあら
ゆる知識を手に入れていたこともあったのに。

「神氣……それが千歳に宿った力。とっても珍しくて、とっても難
しい力」

「僕には何の力も宿ってなんかないよ。だって、家中の人間が全員

僕からは何の力も感じられないって言ってるんだから」

だから僕は、諦めたのだから。

「感じ取れるわけないよ。本当なら人間に宿るような力じゃないし、人間程度に知覚できる力でもない。でもね、宿った人間がいないわけでもない。千歳みたいに極々稀にだけどそう言った人間もいるんだ。けどね、持たない人間にはどれだけ頑張っても感じ取れるわけのない力。だからみんな勘違いするんだ、こいつには何の力もないって」

「……………」

それが本当ならば。僕は……。

「千歳が術を使えないのは、才能とかそう言う問題じゃなくて、単純に扱ってる力が違うから。電流計じゃあVは感知できない、千歳がやっても発動する様子さえないんじゃない？」

確かにそうだ。どれだけ才能がないんだと周りの人間が嘲笑っていたのを、僕は覚えている。

「でもその理論で行けば僕は他人の靈氣を感じることはできないんじゃないの？」

電圧計じゃあ、Aは感知できない。逆説的に言えば、そう言うことだ。

けれど、ユキがチツチツと指を振る。

「たしかに神氣が靈氣を同格ならそうかもね…………けどね、神氣っていうのは、靈氣よりも格の高い力なんだよ。言わばWかな。だから、靈氣も感知できるし、妖氣を感じ取ることすら可能なんだよ」

「妖氣……………もしかしてあの赤い靄みたいな」

「多分それだね」

「そっか……………そっかあ……………はは」

笑える。散々才能がないだとか、僕はダメなんだとか、そんなことを考えてたくせに。周りの連中も僕を馬鹿にしてたくせに。

蓋を開けてみれば、こんな単純な話だったのか…………。

「……………ねえ、じゃあ神氣っていうのを使いこなせれば、僕も何

かの術を使えるの？」

「神気の術は難しいよ。人間に扱いきれるかどうかは知らないけど……」

使いこなせれば、最強だよ。

ユキのその言葉に口が緩む。

「………ねえ、ユキ」

「なに？」

「………僕の……式になつてくれない？」

式とは、陰陽師の間にだけ伝わる隠語^{スラング}。けれど何となくユキになら伝わる気がした。

「………唐突だね」

「そうかもしれない。けどさ、ユキとなら、僕は妖怪とでも何でも戦える気がするんだ」

ユキの言葉には何度救われたか分からない。ユキがいなかったら、今日僕は確実に死んでいた。

「………しょうがないなあ、千歳は」

笑い声に顔を上げる。そしてユキは悪戯っぽくニカツと笑って。

「よろしく……千歳」

そう言った。

03（後書き）

式↓過去の陰陽師たちが使っていた式神というものに擬えて考えられた隠語。要するに体を張って妖怪たちと直接対峙する前衛職の人たちのこと。かつての陰陽師たち調伏させた妖怪を自身の手駒として使っていたのと同じように、陰陽師を補佐する人のことを指すときもある。

今回千歳が言ったのは前者の意味。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265z/>

古き都の夢幻

2011年12月6日02時50分発行